



TITLE:

<大會抄録>宋代道學における宗法論の思想史的位置

AUTHOR(S):

佐々木, 愛

CITATION:

佐々木, 愛. <大會抄録>宋代道學における宗法論の思想史的位置. 東洋史研究 2001, 60(3): 560-560

ISSUE DATE:

2001-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155394>

RIGHT:

大會抄錄

宋代道學における宗法論の思想史的位置

佐々木 愛

宋代、道學の系譜に属する人々——張載、程頤、朱熹は、經書に記された古の親族組織法である宗法を、現今において再び實踐すべきであると主張している。従來の研究では、宗法は親族結合のイデオロギーであり、彼らの宗法實踐の主張は親族結合の希求である、と解されてきた。このような解釋は、彼らの主張を宗族結合の端緒が生まれた宋代という社會史的文脈の中で理解することを可能にするものであるが、その一方、宋代に新興した道學者としての思想史的文脈を考慮しつつテキストを読むという姿勢を缺いていた。

筆者は最近、彼らの宗法論を検討し、彼らの宗法復活とは、嫡長子の優位と祭祀權の嫡長子一子繼承をめざすものであったが、それは親族の結合を期待してではなく、彼らの宗法復活の主張を親族の結合をめざしたものとはいえないこと、また現實の親族觀念と乖離した宗法の嫡長子主義の實踐は實際にはきわめて困難であり、にもかかわらず宗法復活を主張したのは、所與の理想たる古への復歸を目指すという、道學のある種原理主義的ともいえる思想的文脈の中から生まれたものであること等を指摘した。

本報告は、このような彼らの宗法論が、宋代當時及びそれ以後の時代において、どのように理解され、利用され、或いはその克服が

圖られていったのか、その思想史的位置附けのための一定の見通しを提示しようとするものである。

南宋期の地域社會における「友」

岡 元 司

『論語』・『孟子』から、六朝や唐代の詩人たちの交遊、そして清代の幕友などに至るまで、傳統中國社會において、「友」という概念は、人間關係の重要な一要素として認識されてきた。とりわけ近年の明清史研究においては、小川晴久氏・小野和子氏・マクデモット氏の論考などによつて、「友」の果たした役割への關心が高まりつつあり、傳統中國の人的結合の柔軟で選擇的な側面を示す材料としても注目されるように思う。

本報告では、唐宋變革をへて地域社會における士大夫の活動が活発化していた南宋期について、かれらの相互關係を示す言葉としてしばしば用いられる「友」の分析を試みたい。南宋期は、朱熹だけでなく、諸學派が各地域において獨自の理論を競合的に提唱していた時期であり、相互の交流も活況を呈していた。本報告は、その一つである永嘉學派の思想家たちの據點となった温州およびその周囲の地域を中心に取り上げ、薛季宣、陳傅良、葉適、王十朋、そしてまた彼らを取り巻く人物たちの間で、「友」という用語がどのような関柄で用いられていたかを具體的に検討するとともに、「友」がいかなる意味を込めた關係として同時代人に認識されていたか、ま